Shinshu University Journal of Educational Research and Practice, No.6, pp.75-87, 2013
信州大学教育学部研究論集　第6号　pp.75-87　2013年

＜学術論文＞

『重力の虹』におけるカバラ

―死の克服の鍵となる期待―

金子史彦　信州大学教育学部言語教育講座

キーワード：トマス・ピンチョン，『重力の虹』，カバラ

1．はじめに

トマス・ピンチョン (Thomas Pynchon) の『重力の虹』 (*Gravity's Rainbow*) は非常に多岐にわたる膨大な情報が詰め込まれている，長大かつ混沌とした作品である。話の流れに従って読み進めていくだけでは理解することが難しい。あるいは理解への手掛かりすら掴めずに終わってしまうということになりかねない。そこでこの作品を解釈するに当たっては，作中で何度も登場する事項や概念に着目し，それらがどのように描かれどのような役割を果たしているかを検証していくことが有効である。そうやってこの混沌とした作品世界に何らかの一貫したテーマを確立することが出来れば，それが作品の全体像を理解していくことの手掛かりとなることが期待されるからである。

『重力の虹』にはカバラというものが再三登場する。そしてその登場の仕方は大抵唐突である。読者の多くは，この作品におけるカバラとはどのような意味を持っているのか，と不思議に思うことであろう。本稿ではこれに着目し分析していきたいと思う。先ず『重力の虹』から一旦離れて，カバラについて簡単に見てみよう。カバラとは，伝承や伝達を意味するヘブライ語の Qabbalah に由来し，現在ではユダヤ神秘主義を意味する語句として用いられる 。神秘主義とは「神や絶対的なものと自己とが体験的に接触・融合することに最高の価値を認め，その境地をめざして行為や思想の体系を展開させる哲学・宗教上の立場」(デジタル大辞泉) であり，「ユダヤの神秘家のすべてが神秘的合一を切望したわけではないが，カバラは，それが日常的経験の限界を超え，知性と感性の通常の行使では把握できない神的なものと創造の理解を目指すかぎりにおいて，ひとつの神秘主義であると見なさなくてはならない」 (p. 7) とロラン・ゲッチェル (1999) は述べる。そしてカバラにおいてその神秘的合一，神的なものと創造の理解へと達する方法は聖書，とりわけモーゼ五書と呼ばれるトーラーの解読である。ゲッチェル (1999) はそれを詳細に説明している:

> ＜トーラー＞のあらゆる戒律と物語の背後で，神は＜トーラー＞の文字のなかに自分の名前を明かしており，それはまた創造の隠された法則の総体を含んでいるのである。＜トーラー＞はまた，ひとつの全体として，生きた有機体として定義される。そのことから，＜トーラー＞は，一方では流出の世界全体と等質であり，他方では人間の全

体と等質である、ということになる。各戒律にそれぞれ人体の四肢のひとつが対応し，天界におけるひとつの霊的原理が対応する。それゆえ，戒律を遵守することによって，人間は高次の世界を衝き動かすことができるのである。＜トーラー＞の研究とその完璧な実践は，人間を人生における到達可能な最終目標，＜デベクト Debekhut＞（神への固着）に導く。 (p. 141)

トーラーを完璧に実践するには，それを完璧に理解し把握する必要がある。しかし第5章で詳しく見ることになるように，人々が実際に触れることのできるトーラー，つまり聖書はトーラーそのものではない。物事の本質を万人に理解できるような言葉で伝えるのは限界があり，成文化する段階でトーラーの本質が失われたり歪められたりするのは避けられなかった。そのためトーラーを完璧に理解しその本質に触れ神秘的合一を果たすには，個々人がトーラーを解読する必要がある。それを試みるのがユダヤ神秘主義でありカバラであるというわけだ。

ここで作品に戻ろう。『重力の虹』にはカバラ，カバリスト，その他にもカバラ関係の言葉がたびたび登場する。それもコールタールのカバリストであるとかロケットがトーラーであるとか，およそカバラのイメージにそぐわないものと結び付けられる形で提示される。そして果てはカバリストのスポークスマンなる存在まで現れる。このようにカバラというものがこの小説の中で一定の存在感を持っていることは明らかであるのであるが，それでは『重力の虹』におけるカバラとはどのようなものか，という話になるとなかなか明確な姿が見えてこない。その原因はやはり，作中でのカバラに関する話がそれぞれお互い関連がなく，全体が混沌とした状態のように見えることであろう。カバリストのスポークスマンというものからして，何故スポークスマンなのか解りづらく，いわば名前負け，あるいは読者を幻惑しミスリードを狙ったものではないかとすら思えてくる。それを反映してか，『重力の虹』に関する研究論文で，作中におけるカバラを重点的に扱ったものは少ない。数少ない例として，ドワイト・エディンス (Dwight Eddins, 1990) はロケットをトーラーと見なすヘレロ族に注目し，母なる自然のエントロピーに対抗し制御しようとする試みがカバラに結びついていると論じる。地球，自然，オルペウス教といったものに対立するのが言語，科学，グノーシス主義，そしてカバラだというのである。エディンスはあくまでも自然に対抗する人為の一つの顔としてカバラを論じているが，本稿ではよりこの作品におけるカバラというものに焦点を絞っていく。カバラに関連する登場人物，あるいは描かれたカバラそのものに何か共通性は見いだせないか，この小説では統一されたカバラの姿を提示していないか，そしてカバラは作中でどのような役割を果たしているのかを分析する。『重力の虹』におけるカオス状態のカバラはある意味，多岐に渡る情報がお互いに無関係に詰め込まれているこの作品世界を象徴しているともいえる。故にそれに着目して分析し統一されたカバラ観を確立することは，カバラだけにとどまらず，この混沌とした作品全体に通底する主題を確立する一助になると思われる。とりわけロケットをトーラ

ーと見なすロケットのカバリストや，ロケット発射のカウントダウンに生命の木が隠されていると主張するカバリストのスポークスマンは，『重力の虹』のトピックの中心であるロケットに深く関わっているのが明らかであり，カバラのテーマの探求が作品全体の主題の読解に寄与するであろう。

先ず作中のカバラ関係の印象的な話を一つずつ検証し，それと並行してそれらの比較研究を行う。各個見ているだけでは解らないことでも比較することによって各々が新たな意味を持つようになるものだからである。そのように検証していく過程で明らかになっていくことは，『重力の虹』でのカバラは死の克服と密接につながっているということである。言い換えれば，カバラに深く関わっている登場人物たちはそれに死の克服の鍵となることを期待しているのがわかってくる。さらにそのようなカバラ観は，以前筆者が拙稿「トマス・ピンチョンの『重力の虹』における死後生存仮説と超 ESP 仮説の論争――交霊か？テレパシーか？――」（『比較文化研究』No.100　2012 年 3 月 pp. 199-209）で論じた死後の世界に関する概念ともつながってくることも明らかにしていく。つまり，本研究は『重力の虹』におけるカバラを考察するだけに止まらず，作品内でそれがより広範囲の主題に関わっていることも論証するのである。

2．黒の軍団 ― ロケットという名のトーラー

最初に取り上げるのはヘレロ族 (the Hereros) の黒の軍団 (the Schwarzkommando) のリーダーであるエンツィアーン (Enzian) という人物である。何故ならこの人物に関連してカバリストという呼称が何度も出てくるからである。エンツィアーンは彼等自身がカバリストと見なされると述べる:

> We *are* supposed to be the Kabbalists out here, say that's our real Destiny, to be the scholar-magicians of the Zone, with somewhere in it a Text, to be picked to pieces, annotated, explicated, and masturbated till it's all squeezed limp of its last drop . . . . that holy Text had to be the Rocket, orururumo orunene the high, rising, dead, the blazing, the great one . . . . our Torah. (Pynchon, 1995, p. 520)

黒の軍団は，打ち上げに失敗したロケットの残骸を探し集めて黒のロケットを作ることを目指しているのだ。カバリストである彼等にとって，トーラーにあたるのはロケットであるというわけである。トーラーの完璧な理解と実践がカバラの根幹であることは既に見た。ゲルショム・ショーレム (2011) も，カバラにおいて「『トーラー』とは、人間的な次元の解釈のありとあらゆる相に先立つ絶対的なもの」 (p. 60) であると述べ，スタンスは異なるにせよカバリスト達にとってトーラーをどのようなものと位置づけ，その奥義に達するとはどのようなことかを考察することが大変な重要性を持ってきたことを論じている。古色蒼然たるトーラーと近代科学の申し子であるロケット，この両者は全く結びつかないように思われる。なぜエンツィアーン率いる黒の軍団にとってロケットがトーラーの役割を

果たすようになったのかについて，ドワイト・エディンス (1990) はロケットが森羅万象を解き明かす鍵となるからであると分析する:

> For its own Kabbalists, then, the Rocket is the Logos,the ultimate rationale and reflection of the connectedness of the cosmos. To interpret it correctly is to understand the purpose of existence, the goal toward which history moves. Like the Torah, it both sets forth that goal and is that goal in its broadest meaning. (p. 139)

いずれにせよカバリストにとってトーラーの追及は奥義に達することと結びついているわけであり，エンツィアーンたちにとってロケットがそのような意味を持っていたわけである。彼等にとって奥義に達するとはどのようなことなのか。それを詳しく検証していこうと思う。

エンツィアーンたちのロケット探求は，死を克服しようという願望とつながっている。ヘレロ族は死者との交信を試みる民族であることが統計学者のロジャー・メキシコ (Roger Mexico) によって述べられている: "There are peoples—these Hereros for example—who carry on business everyday with their ancestors. The dead are as real as the living. How can you understand them without treating both sides of the wall of death with the same scientific approach?" (Pynchon, 1995, p. 153) 。実際エンツィアーンが，果たして死後再生できるのかどうかについて思いを巡らせている様子が描写されている:

> His tribe believed long ago that each sunset is a battle. In the north, where the sun sets, live the one-armed warriors, the one-legged and one-eyed, who fight the sun each evening, who spear it to death until its blood runs out over horizon and sky. But under the earth, in the night, the sun is born again, to come back each dawn, new and the same. But we, Zone-Hereos, under the earth, how long will we wait in this north, this locus of death? Is it to be reborn? or have we really been buried for the last time, buried facing north like all the rest of our dead, and like all the holy cattle ever sacrificed to the ancestors? (Pynchon, 1995, p. 322)

そしてエンツィアーンは，死とは月のウサギによって真実のメッセージの代わりに月からもたらされたものであり，いつの日かロケットによって彼等が月に行きその真実を知ることが出来るだろうと述べる:

> The history of the old Hereros is one of lost messages. It began in mythical times, when the sly hare who nests in the Moon brought death among men, instead of the Moon's true message. The true message has never come. Perhaps the Rocket is meant to take us there someday, and then Moon will tell us its truth at last. (Pynchon, 1995, p. 322)

つまり月の真のメッセージを知ることが死の克服になるわけであり，それを実現する手段がロケットなのである。それ故ロケットを捜索しているわけだが，エンツィアーンはそんな自分をカバリスト，ロケットをトーラーと見なしているのだ。既に見たようにトーラーとは「人間的な次元の解釈のありとあらゆる相に先立つ絶対的なもの」であるが，その奥

義に達しようとするカバリストは真のメッセージに達しようとする黒の軍団と，そのための手段・媒介となるロケットはトーラーとイメージが重なるのであろう。奥義に達することは死の克服なのである。そしてエンツィアーンたちのカバリズムの目的は死の克服であることは心に留めておく必要がある。

3．グレタ・エルトマン ― 黒のシェキナー

次に注目すべきは，自分自身をシェキナー (Shekinah) と見なすマルゲリータ (Margherita) ことグレタ・エルトマン (Greta Erdmann) の行為である。何故ならカバラにおいてシェキナーとは「神の女性的側面で人間界を放浪していると言われ」(エドワード・ホフマン, 2006, p. 88)，故にエンツィアーン同様グレタも己がアイデンティティーを確立するにあたってカバラによりどころを求めているのが明白だからである。一人の少年を捕獲しながらグレタは，彼女自身がシェキナーであり，その少年をそのように捕獲することは使命であるというように語る:

> "You know who I am, too. My home is the form of Light," burlesquing it now, in heavy Yiddish dialect, actress and false, "I wander all the Diaspora looking for strayed children. I am Israel. I am the Shekhinah, queen, daughter, bride, and mother of God. And I will take you back, you fragment of smashed vessel, even if I must pull you by your nasty little circumcised penis—" (Pynchon, 1995, p. 478)

ここでのグレタのアイデンティティーはまさしく，ショーレム (2006) がまとめるカバラにおけるシェキナー像と符合する:

> シェキナーは,「光の形式」を生家としながら遠隔の地に移り住まねばならない「娘」となっている。その後他の多くのモチーフが――ゾーハルに見られるような――このシェキナー像を補完することに寄与した。わけてもシェキナーはここでは「イスラエル共同体」と同一視されたが，これは一種の目に見えない教会として，神と契約を結んだ幸福なイスラエル，しかしまた苦悩する流浪のイスラエルの神秘的理念を表すものであった。シェキナーは今や単に女王，神の娘にして花嫁とされるだけではなく，イスラエルのひとりびとりの母となる。・・・・かくてシェキナーは，カバリストの幻視者には，ルーリアの弟子アブラハム・ハーレーヴィが見たように，女として現れる。 (pp. 302-303)

しかしグレタは実際には嫌がる少年をかどわかそうとしているも同然であり (he was trying to break away, but her hand, her gloved hand, her claw had flown out and seized his arm (Pynchon, 1995, p. 478))，果たして本当に自身が主張するようなシェキナーと見なせるのかという疑問が生じる。これに関してスティーヴン・ワイゼンバーガー (Steven Weisenburger, 2006) は，シェキナーには明暗二つの面があり，ここのグレタはシェキナーの暗黒面として現れており，彼女の黒ずくめの衣装 (Greta had dressed all in black (Pynchon, 1995, p. 477))

はその象徴であると述べる:

> The proper home of the Shekinah is with the sun, symbol of Yahweh's masculine light. But she also has a dark side, appearing as the moon, a lightless receiver of light. As such, she is especially susceptible to domination from demonic powers from the Other Side, when she appears as the tree of death, symbol of punishment and retribution. Thus, in her black garments . . . , Greta appears to the boy as exactly this demonic emissary from the other side. She is the Shekinah as destroyer. (p. 265)

このシェキナーの暗黒面と黒い衣装，さらにトーラーが結び付けられてきたのであるとショーレム (2011) は分析する:

> 『トーラー』の衣裳という考えは，それぞれニュアンスがかなりまちまちではあるが『ゾハール』のこの最後期の段階で何度も繰り返し現れる思想である。この考えの土台にあるのは，シェキナー（これは女王ないし貴婦人でもある）を，人間に啓示されたごとき『トーラー』と等置する考えである。このため，この衣裳の色はアダムの堕罪以降，それもとくに流謫の時代のあいだは，喪の状態にあることを表す黒だ，と何度も述べられている。しかし他の箇所では，この黒い衣裳とはまた『トーラー』の語義のことを言っているのでもあって，それがこの色によってはじめて目に見えるようになるのだという・・・・義人は，善行によって，おそらくはまたその人並すぐれた洞察力によって，「語義という陰気な衣裳と『タルムード』の詭弁から彼女を解き放ち，『トーラー』の奥義たる光り輝く衣裳で着飾ってやることにより」，シェキナーを照らしだすのだと言われている。 (pp. 90-91)

こういった背景を考慮に入れた上で前章で検証したエンツィアーンら黒の軍団について再び考えると，彼等のカバリストのイメージについて新たな面が発見できる。作中に注目すべき記述がある: "So the assembly of the 00001 is occurring also in a geographical way, a Diaspora running backwards, seeds of exile flying inward in a modest preview of gravitational collapse, of the Messiah gathering in the fallen sparks" (Pynchon, 1995, p. 737) 。つまりエンツィアーンらはまさしくロケット 00001 号の部品を集めて組み立てようとしているのだが，その部品はディアスポラに喩えられているのである。そしてそのようなエンツィアーンらは子供をディアスポラと見なして連れて行こうとするグレタとイメージが重なってくる。ディアスポラとはバビロン捕囚後にユダヤ人がパレスティナから離散したこと，あるいはその離散したユダヤ人のことである。そして黒い軍団と黒づくめの衣裳のグレタというように共に黒という色が強調されている。

さらにエンツィアーンとグレタの比較を進めてみよう。エンツィアーンのカバリズムの目的が死の克服であることは前章で見た。グレタにそのような要素は見受けられるのか。既に見たようにワイゼンバーガー (2006) は黒の衣裳を着て子供を脅かすグレタは "susceptible to domination from demonic powers from the Other Side" (p. 265) であると述べてい

る。この“the Other Side”と聞いて普通連想するのはやはり死後の世界であろう。もし死後の世界からこの世に働きかけてきたり舞い戻ってきたりしているのであれば，それは絶対的な終わりとしての死の否定であり，死の克服へとつながる。シェキナーの暗黒面の権化となったグレタはその表れとして黒の衣裳を身に着けていたのだが，それだけでなく黒の泥 (black mud) と深く関わっていることが描写されている。このグレタの異様な行動はバッドカルマ (Bad Karma) と名付けられた黒の泥で満ちたラジウム鉱泉の縁で行われ，彼女はラジウム鉱泉の黒の泥の権化だというのである。そしてこの黒の泥が，彼女と“the Other Side”の結びつきを探る鍵となる。彼女はベルリンの路上で死体を発見し，朝までそれを抱きしめていたと語る。そしてその死体に住んでいる世界について尋ねると，それは“We live very far beneath the black mud” (Pynchon, 1995, p. 483) と答えたというのである。黒い泥をキーワードとしてグレタは死後の世界とつながっているのである。そして実際に彼女は冥界下りの疑似体験をする。ブリセロ (Blicero) に導かれて夫のタナツ (Thanatz) と共にブリセロの故郷に来た，とグレタは述べる: “I understood then that Blicero had brought me across a frontier. Had injected me at last into his native space without a tremor of pain.” (Pynchon, 1995, p. 487) 。そこはイミポレックスという黒い素材の世界でもあることが強調され，彼女はそれで作られた黒い服を着せられたという: “They took away my clothes and dressed me in an exotic costume of some black polymer, very tight at the waist, open at the crotch. It felt alive on me. ‘Forget leather, forget satin,’ shivered Drohne. ‘This is Imipolex, the material of the future.’” (Pynchon, 1995, p. 488) 。作中で再三ブリセロは，この世と死後の世界を行き来する存在であるかのように述べられる。また霊媒キャロル・イヴェンター (Carroll Eventyr) の交霊会において，支配霊 (control) のペーター・ ザクサ (Peter Sachsa) は“Once transected into the realm of Dominus Blicero, Roland found that all the signs had turned against him” (Pynchon, 1995, p. 30) と，故人ローランド・フェルズパス (Roland Feldspath) が存在している世界がブリセロの領域であるかのように語る。さらにこの“into the realm of Dominus Blicero”という表現に関して，ワイゼン・バーガー (2006) は“In short: into Death’s domain. Pynchon’s source is Grimm’s *Teutonic Mythology* (849-50). ‘*Blicero*’ is one of the many Germanic nicknames for death” (p. 37) と分析している。このようにグレタは自身が冥界のような世界に行き，そこからこの世に舞い戻り，そして黒の泥の下にあるという死後の世界に子供を連れ去ることを使命と捉えている。この世とあの世の両方にまたがって活動するという意識であることは疑いがない。そのようなことが可能になれば生の絶対的な終わりである死の意味，権威は薄れてしまうであろう。そうなれば人々は死をそれほど恐れる必要もなくなり，つまるところ死は克服されることになろう。

4. コールタールのカバリスト — 死と再生

さらに注目すべきものはコールタールのカバリストなる存在である。これまた唐突に作

中に登場してくる。ライル・ブランド (Lyle Bland) という人物がまるで交霊を行っているかのように別世界で死者と交流し，その後またこの世界に戻ってくる様子が描かれているのだが (He comes back raving about the presences he has found out there, members of an astral IG, whose mission—as indeed Rathenau implied through the medium of Peter Sachsa—is past secular good and evil: distinctions like that are meaningless out there (Pynchon, p. 590))，その関連でコールタールのカバリストの存在が言及される。そのような不可思議な異世界体験を重ね，ブランドは地球が生き物であることに気付き超感覚的な存在を感じるのだが，そこであちらの世界のコールタールのカバリスト (the coal-tar Kabbalists of the other side) という表現が出てくるのである:

> To find that Gravity, taken so for granted, is really something eerie, Messianic, extrasensory in Earth's mindbody . . . having hugged to its holy center the wastes of dead species, gathered, packed, transmuted, realigned, and rewoven molecules to be taken up again by the coal-tar Kabbalists of the other side, the ones Bland on his voyages has noted, taken boiled off, teased apart, explicated to every last permutation of useful magic, centuries past exhaustion still finding new molecular pieces, combining and recombining them into new synthetics. (Pynchon, 1995, p. 590)

ブランドの異世界体験が事実であるかそうでないかについては判断材料が乏しい。ブランドは幽体離脱のように魂だけが肉体から抜け出して異界を旅し，再びこの世の肉体に戻ってくるというのだが，その様が "Bland, still an apprentice, hadn't yet shaken off his fondness for hallucinating. He knows where he is when he's there, but when he comes back, he imagines that he has been journeying underneath history" (Pynchon, 1995, p. 589) と描写されている。つまりブランドの異世界体験が彼自身の単なる想像であるとも解釈できる文面である。異世界に行っている(と彼自身が思っている) 間のことは何処か別の所に行っていたという程度しか記憶が残っていないということも述べられている: "He would lie down in his study on the davenport, not thinking about anything in particular, and come back with a jolt, his heart pounding terribly, knowing he'd just been *somewhere*, but unable to account for the passage of time" (Pynchon, 1995, p. 588)。これは霊媒のキャロル・イヴェンターが交霊を行っている間の記憶が無いというのと呼応しているように見える: "There's no memory on his side: no personal record. He has to read about it in the notes of others, listen to discs. . . . . Eventyr knows how close he is to Sachsa on the other side, but he doesn't *remember*" (Pynchon, 1995, p. 153)。しかしイヴェンターの場合，彼が交霊を行っている間，霊に憑依された彼自身が語ることを記録する係の人間がいるため，彼の異世界体験を知ることができる。もちろんその内容が事実かどうかはまた別問題であるが。一方，ブランドの場合そのような記録者は存在しない。よって，彼自身のはっきりとした記憶がない異世界体験をどうやって知ることが可能なのか，ということを考えると，それは彼の想像であると考えるのが自然であろう。実際，この世に帰って

きてか彼自身がたった今経験してきた旅路について想像をしていることが言及されている: "He knows where he is when he's there, but when he comes back, he imagines that he has been journeying underneath history: that history is Earth's mind, and that there are layers, set very deep, layers of history analogous to layers of coal and oil in Earth's body" (Pynchon, 1995, p. 589) 。このようにブランドの異世界体験が事実であるかどうか，つまりコールタールのカバリストなるものが実在するかどうかは不明なままで終わる。しかし重要なことは，少なくともコールタールのカバリストというような概念が作品内で描かれ，登場人物がそれを信じているということである。そしてそれはこれまでに見てきたエンツィアーンやグレタのそれ，ロケットがトーラーであるということやグレタが黒のシェキナーであるということについても同じである。

コールタールのカバリストと黒づくめの服を着たシェキナーのグレタを比較すると，カバラということ以外にも共通する点がいくつかある。先ずともに地下・地底と密接に関わっているということである。グレタが鉱泉の底のような地下世界と深くつながっていることは既に検証した。またコールタールのカバリストも，地球の中心に堆積した生物の死骸の再構成に関与しているのであるから当然地下的存在である。次に黒という色との関係である。グレタと黒色に関しては既に散々見てきた。一方コールタールも言うまでもなく黒色の物質である。コールタールという，カバラと一見何の関連も無さそうな物質がその属性として選ばれているのであるから，黒色ということを強調したい故の選択のようにも捉えることが可能である。

さらに注目すべきことは死と再生という問題である。冥界のような世界の権化となっているグレタだが，普通にこの世に生存している。そして子供を地下世界に誘おうとする。それではコールタールのカバリストはどうか。彼等自身は"the coal-tar Kabbalists of the other side"と明言されており，また交霊の旅路の途中のブランドの目に留まったというのであるからこの世の存在ではない。それが生物の死骸を集めて再構成，新たな分子を発見して新たな合成品へと再結合させるというのであるから，自身が再生せず他のものを再生させているわけである。一見黒のグレタとコールタールのカバリストは対照的に見える。自身はこの世にいて他のものをあの世へ送ろうとする前者と，自身はあの世にいながら他のものを再生する後者。しかし，バッドカルマ，黒の泥で満ちたラジウム鉱泉の縁においてグレタの手から少年を救った日本人のモリツリ少尉 (Ensign Morituri) は注目すべき言葉を残している:

> "I was with her at the edge of one radioactive night. I know what she saw this time. One of those children—preserved, nourished by the mud, the radium, growing taller and stronger while slowly, viscous and slow, the currents bore him along underground, year by year, until at last, grown to manhood, he came to the river, came up out of the black radiance of herself to find her again, Shekhinah, bride, queen, daughter. And mother. Motherly as sheltering mud

and glowing pitchblende" (Pynchon, 1995, p. 479)

まるで地下の黒の泥の中へと投げ込まれた子供が再生して以前より成長して戻ってきた，そしてそれを司っているのがグレタであるかのように述べている。死と再生に関しても黒のグレタとコールタールのカバリストは共通点があるのである。死者を再生させることは死の克服につながるのは言うまでもない。

5．カバリストのスポークスマン ― カバラ観の完成

グレタ及びコールタールのカバリストとエンツィアーンら黒の軍団に共通点を見出すのが簡単であることは論を待たない。黒という色，カバラが死の克服へと繋がる思想は明白な共通点である。しかし逆に相違点もあるように見える。それはグレタやコールタールのカバリストが地下的な存在であるのに対してエンツィアーンはロケットで月へと上昇するのが死の克服への手段であるということである。グレタやコールタールのカバリストの場合地下へと下降することが死を克服して再生する鍵となるのであり，一方エンツィアーンの場合は上昇という正反対なことが必要なのである。

これを解く鍵は，カバリストのスポークスマン (Kabbalist spokesman) たるスティーブ・エーデルマン (Steve Edelman) なる人物によって示唆されている。エーデルマンはエンツィアーン率いる黒の軍団についての話を収集しており (Pynchon, 1995, pp. 314-15) ，この小説での彼等の描写のかなりの部分が彼の手によるものである可能性も残されている。先ず彼はロケット発射のカウントダウンには生命の木が隠されていると述べる: "Although the Rocket countdown appears to be serial, it actually conceals the Tree of Life, which must be apprehended all at once, together in parallel" (Pynchon, 1995, p. 753) 。生命の木というと，アダムとイブが追放された楽園に生えていたそれを連想する。カバラでは「そのままでは完全に直接受けとめることが人間の意識にはできないような絶対的なもの」である成文トーラーがその生命の木と等置される (ショーレム, 2011, p. 92) が，それは楽園喪失以降人間の意識で直接受けとめることができなくなったものという意味での比喩であろう。その成文トーラーと対比されるものが口伝トーラーで，実際に人間社会でトーラーとして活用されているものである。口伝トーラーは善悪を知る認識の木と等置される (ショーレム, 2011, p. 91) 。この生命の木の思想に裏打ちされたエーデルマンの主張は，ロケットをトーラーと見なしその探求に情熱を燃やすカバリスト，エンツィアーンの行動と符合する。そしてエーデルマンはその生命の木は地軸に根差していると主張するのである: "But the Tree itself is a unity, rooted exactly at the Bodenplatte. It is the axis of a particular Earth, a new dispensation, brought into being by the Great Firing." (Pynchon, 1995, p. 753) 。この考えに則れば，エンツィアーンの主張するロケットでの上昇はグレタやコールタールのカバリストの地下的要素とつながりを持ってくる。生命の木でありトーラーでもあるロケットは地軸といういわば地下，それも地球の中心とも見なせる存在に根差しているのだ。よく考えてみれば、グレタ

によって地下へと送られた子供はその後成長して地上へと戻ってくるのであるから，一度地球の中心近くへと根差した存在にされた後で上昇するとも見なせる。地球の中心に堆積した後コールタールのカバリストによって再生される死骸も然りである。このように見ると『重力の虹』に登場する代表的なカバラの関係者であるエンツィアーン，グレタ，そしてコールタールのカバリストはつながりが無いように見えて，実はかなり似た存在であることがわかる。一見バラバラに見えるが，実際にはこの小説におけるカバラ観という一つのイメージに集約されていくと言ってもいい。しかし，それはエーデルマンの手が加わることによって初めて可能になるのは見てきたとおりである。エーデルマンはカバリストのスポークスマンとされているが，まさしく彼の手によって『重力の虹』におけるカバラというものが統一された形で読者にも知ることが出来るようになるということを考えれば，その肩書きにも大いに納得出来る。

しかし，そのエーデルマンの主張もまたその中に不可解で非合理的に見える点を孕んでいる。上で見たように，彼はロケット発射のカウントダウンに生命の木が隠されていて，その生命の木は地軸に根差しており，その地軸は "brought into being by the Great Firing" であると述べているのである。この "Great Firing" はこのカウントダウンによって打ち上げられるロケットの発射のことだと解釈される。しかし，そうすると時間軸がおかしくなる。カウントダウンの段階ではまだ発射されていないはずだが，その発射によって形成される地軸に根差しているのがそのロケットのカウントダウンに隠されている生命の木であるというのだから。ロケットの発射という「原因」によって「地軸」という結果が起こるはずなのだが，これでは原因が起こる前に既に結果が起きていることになる。原因と結果の関係，つまり因果律に矛盾をきたす，いわゆるタイムパラドックスが起こっているのである。これはどう捉えるべきであろうか。この問題に関してダグラス・ファウラー (Douglas Fowler, 1980) は次のように述べる:

> The soul's journey back to God is yet another version of the perilous quest that appears in every one of the world's great mythologies. Joseph Campbell points out how, again and again, the quester must drive *beyond* time, transcend "the painted wall of space-time with its foul and fair, good and evil, true and false display of the names and forms of merely phenomenal pairs of opposites" (*The Mask of God*, 455). The "Great Firing" of the 00000 is such a portal through the wall of our space-time, with an Elidadean "Tree of Life" growing out the Rocket's launch platform, negating serial time and physical space in its magic centripetal regathering. (p. 265)

つまり世界各地の神話に繰り返し現れるテーマであるというのだ。しかし本稿ではあくまでも作品内のコンテクストでこの問題を考えてみたいと思う。

筆者は拙稿「トマス・ピンチョンの『重力の虹』における死後生存仮説と超 ESP 仮説の論争——交霊か？テレパシーか？——」(『比較文化研究』No.100　2012 年 3 月 pp. 199-209) において，『重力の虹』では因果律の否定と死後生存の肯定が結びついていることを論じた。

それを簡単に振り返ってみよう。先ず，心霊主義と相容れないエドワード・ポインツマン (Edward Pointsman) というパブロフ派の科学者は，因果律を否定することは歴史の終焉を意味する危険思想であると考える:

> Innocent as a child, perhaps unaware—perhaps—that in his play he wrecks the elegant rooms of history, threatens the idea of cause and effect itself. What if Mexico's whole *generation* have turned out like this? Will Postwar be nothing but "events," newly created one moment to the next? No links? Is it the end of history? (Pynchon, 1995, p. 56)

そしてこれに呼応するかのように，交霊によって呼び出された霊たちが，死後の世界では因果律が意味を持たないこと，そしていわゆる歴史というものがフィクションに過ぎないことを主張するのだ。例えばドイツの外務大臣のヴァルター・ラテナウ (Walter Rathenau) の霊は: "All talk of cause and effect is secular history, and secular history is a diversionary tactic. Useful to you, gentlemen, but no longer so to us here" (Pynchon, 1995, p. 167) と述べる。またペーター・ ザクサ の霊はより明確な形で，先ず最初に原因が有りその後それによって結果が起こるという関係を，原因も結果も分割できない部分の名称に過ぎないと説いて否定している: "The illusion of control. That A could do B. But that was false. Completely. No one can *do*. Things only happen, A and B are unreal, are names for parts that ought to be inseparable" (Pynchon, 1995, p. 30) 。ラテナウの霊はさらに物事の差異，それに基礎を置く二項対立があの世では無意味であると断言する: "Rathenau implied through the medium of Peter Sachsa—is past secular good and evil: distinctions like that are meaningless out there" (Pynchon, 1995, p. 590) 。生と死のような物事の差異の基礎の上に成り立っている世界が決して唯一無二ではなく，あくまでも多くの選択肢のうちの一つに過ぎない，そしてそれを実際に他の選択肢である死後の世界から主張する。このようにこの作品世界では因果律の否定は死後生存の肯定に結びついているのである。

このコンテクストでエーデルマンのタイムパラドックスの意義も理解することが可能である。既に見てきたようにこの小説においてカバラは統一された形をもっているが，それは上昇と下降の問題に解決のヒントを与えたエーデルマンの手によって完成した。それと同時にエーデルマンはタイムパラドックスを導入するのだが，そうやって因果律を否定することはこの作品のコンテクストでは死後生存の肯定，絶対的な終わりとしての死を否定することによって克服することにつながる。また実際問題，死というものは全てのものよりも後に来るものであり，死によって何もかもが終わるために絶対性があるわけだが，このようなタイムパラドックスが起こりうるのならばその絶対性も揺らいでくる。死よりも後の世界，つまり死後の世界では因果律が無意味であるというのはこのような理由によるのであろう。このように，エーデルマンの主張するタイムパラドックスは「死を克服するカバラ」という図式を強化するよう作用するのである。スポークスマンの名に恥じず，エーデルマンは『重力の虹』におけるカバラに統一した形を与え，さらに自身の主張そのも

のがそのカバラの世界観に則っているのだ。

6．おわりに

『重力の虹』にはカバラ関連の言葉が何度も唐突に出てくる。それらは一見お互い共通性もなくバラバラな状態に見える。本稿ではそのようなカバラには実は共通性があり，統一されたカバラ観のようなものがこの小説の中に提示されているということを検証した。そしてそのカバラ観はカバリストのスポークスマンなる人物によって完成を見る，よってカバリストのスポークスマンとはその看板に偽りなしであることもわかった。間違えてはいけないのは，このカバラ観というのはあくまでも登場人物たちのカバラ観でありこの小説の主張としてのカバラ観ではないということである。カバラが死の克服の鍵になったりするといったことはあくまでも登場人物たちの主張・信条として提示されているのであり，読者は彼等のそういった言説を第三者的な視点から観察する。

本稿では一見バラバラに見えるカバラ関連の話を紡ぎあわせて統一性を見出すことにより，この小説で描かれているカバラ観を明らかにすることに成功した。そして，それは以前に研究した同小説で描かれる死後の世界を巡る世界観とも合致するものがあることも論証した。今後の課題として，そのカバラ観をより小説全体を視野に入れた観点から論じていこうと思う。『重力の虹』は巨大な作品であり，カバラも死後生存仮説も超 ESP 仮説も全てそれを形成している部分である。先ずそういった木を各個検証し，その上で作品全体という森の中での個々の木の位置を検証していくことで，『重力の虹』をより深く分析することが出来ると信じる。

引用文献

Fowler, Douglas. *A Reader's Guide to Gravity's Rainbow*. Ann Arbor: Ardis, 1980.
Eddins, Dwight. *The Gnostic Pynchon*. Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1990.
Pynchon, Thomas. *Gravity's Rainbow*. New York: Penguin Books, 1995.
Weisenburger, Steven C. *A Gravity's Rainbow Companion*. Athens: The University of Georgia Press, 2006.
ゲッチェル，ロラン．『カバラ』田中義廣訳，東京: 白水社, 1999.
ショーレム，ゲルショム．『ユダヤ神秘主義』山下肇・石丸昭二・井ノ川清・西脇征嘉訳，東京: 法政大学出版局, 2006.
ショーレム，ゲルショム．『カバラとその象徴的表現』小岸昭・岡部仁訳，東京: 法政大学出版局, 2011.
ホフマン，エドワード．『カバラ－心理学』村本詔司・今西康子訳，京都: 人文書院, 2006.

（2013年１月30日　受付）
（2013年４月25日　受理）